英　語　科

蒔　田　　守
肥　沼　則　明
久保野　り　え
植　野　伸　子

新学習指導要領に対応した授業作りの工夫（3）

～小中連携と中学校入門期指導のあり方～

1．はじめに

H.E.パーマーが提唱して本校をその実践の場とした「オーラル・メソッド」による指導を大正11（1923）年から行ってきた本校英語科は，平成7年度に現在の4人のうちの3人がそろって新たな局面を迎えた。以来，「育てたい生徒像」（①「生きたことば」でコミュニケーションができる生徒，②困難に対して臨機応変に粘り強く取り組める生徒）を設定し（平成8年度），「聞くこと」「話すこと」を中心とした創造的な言語活動の3年間の指導計画を作成し（平成8～11年度），「自立した学習者」を育てるための4つの要素（①授業，②家庭学習，③授業以外での良質なinput，④英語を使った独自の楽しみ）を相補関係を持たせて指導することの重要性とその具体的指導内容を提案し（平成12～15年度），入門期指導のあり方と具体的な指導内容の提案を行ってきた（平成16～18年度）。また，平成17年度に現在の4人の体制になってからは小学校と高校における英語学習との連携を意識した中学校の英語学習指導のあり方を議論しはじめ，その具体的指導事項を提案した（平成19年度）。

上記のように，本校英語科は，時代の要請によるものだけでなく，英語教育において恒久的に追究されるべき内容を研究してきた。そして，英語科教師全員のコンセンサスを得て，授業を含めた学習指導全般においてそれらの共同実践を行い，その成果を研究協議会や日本全国で行われる研修会や学会等で発表してきた。

2．本年度研究テーマ設定の理由

平成24年度より施行される新中学校学習指導要領では，授業時数が3時間から4時間に増えることに伴って増加する言語材料や言語活動をどのように扱うか，4技能を総合的に育成するための統合的な活動をどのように設定するか，より正確な理解力と表現力を身につけさせるにはどのような指導が必要か，そして新たに導入される小学校の外国語活動で学んだ内容をいかに着実な知識や技能として定着させるか等が求められている。一方，学内では大塚地区の附属小，中，高がこれまで以上に綿密な連携をとって教育を進めていくことが求められ，教科毎に大学の教員も加えた「四校研」が年に数回開かれて，小中高の一貫カリキュラムの作成が進められている（本年度は6年目）。

これらを受けて，本校英語科では平成20年度より「新学習指導要領に対応した授業作りの工夫」をテーマに掲げ，同年度には4技能を総合的に育成するための統合的な活動の例を含めた3年間の授業作りの工夫について提案し，①1年生に対する4技能の総合的育成を行うための指導，②2年生以降の「読むこと」を中心とした統合的活動，③「聞くこと」「話すこと」「書くこと」を統合的に使用した言語活動を紹介した。そして，昨年度は前年度に紹介しきれなかった指導内容を再提案し，新学習指導要領の完全実施に向けて本校英語科として見直さなければならないカリキュラム編成上の課題（①小学校英語活動を経験した生徒に対する実質的な入門期指導の再構成，②3年後の生徒の姿を見据えた指導カリキュラムの再構成）も明らかにした。しかし，研究を進めれば進めるほど，時代の要請としても求められている小学校との連携の重要性を感じるようになってきた。そこで，本年度は特に入門期

指導に焦点をあてて他の中学校でも実践できる指導内容とそれを支える指導理念を提案することにした。

3．小学校外国語活動の現状と小中連携の課題

(1) 小学校外国語活動の実態

平成21年に文部科学省が実施した「平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査」によれば，小学校での外国語活動の実施状況調査や小中連携の状況は以下の通りである。

① 外国語活動の実施（平成21年度予定，平成22年度予定）

平成21年度は，97.8％の小学校が，平成22年度は98.7％の小学校が，5年および6年で外国語活動を実施予定である。また，実施しない学校は，平成21年度は1.3％，平成22年度は0.3％に減少している。

② 外国語活動の平均授業時間数（平成21年度予定，平成22年度予定）

平成21年度は，5・6年とも28.2時間，平成22年度は，32.2時間と増加している。

③ 小中連携の状況（平成20年度実績）

ア）外国語教育に関し，小中連携に取り組んでいる中学校区数

実施している4,587校区，実施していない5,243校区で，小中連携に取り組んでいない中学校区数の方が多い。

イ）連携の内容

・情報交換（指導法についての検討会，合同研修会の実施）	3,266校区
・交流（授業参観，中学校教員による小学校での授業）	3,726校区
・小中連携したカリキュラムの作成	614校区

教員同士の情報交換（検討会，研修会）だけでなく，実際に授業を参観したり，中学校教員が小学校で授業するなど，児童の姿を見ることのできる交流を行っている校区の数が最も多い。しかし，小中連携したカリキュラムの作成を行っている校区は614にとどまっている。

(2) 本校教員が肌で感じる生徒の変化

① 入学候補者の変化

本校では入学候補者とその保護者に向けて，毎年2月に入学準備説明会を実施している。ここ15年ほど英語科は，入門期での英語で進める授業のデモンストレーションを行い，生徒・保護者の不安低減を図る一方，保護者に学習記録コメント記入やテープレコーダー準備など英語授業への協力を依頼している。

授業デモンストレーションを開始した当初は，教員が英語で話し始めたとたん会場に緊張感が走り生徒の顔がこわばった。しかし，ここ数年で状況は一変した。こちらが，"My name is .... Nice to meet you." と話しかけると，生徒たちはニコニコしながら，"Nice to meet you, too." と大きな声で応答するようになった。多くの小学生にとって，英語の定型表現は身近な存在となっている。

② 新入生の変化

一方で，4月の授業開きで，「さあ英語が始まるぞ！」と生徒は新しい授業に期待するも，その瞳はかつてほどは輝かない。総合学習の時間における英語活動や新たに開始

された英語活動のおかげで，英語への緊張感は低減され，ハードルは確かに低くなった。また，英語での積極的な発話も各クラスで見られる。一方で，小学校や英会話学校で得た自信の裏返しから，中学校での英語学習にあまり期待していないと思われる言動や，反対にすでにあきらめて英語学習に希望を見いだそうとしない生徒も散見される。

③ 年度ごとに異なる変化

本校では，上記の変化は一定なものではなく，年度ごとに異なっている。研究会などで報告される話でも，多くの学校で本校と同様の変化があるというが，それぞれ地域により，また年度により変化の内容や度合いが異なっているようだ。その原因は，小学校での指導がどのようなものであったか，例えば，具体的に何年時から外国語活動をはじめ，誰が，どのような内容を，どのように指導したかが異なっているためだと思われる。

(3) 垣間見える小学校教員の現場

① 精一杯の努力

新学習指導要領のもとで「外国語活動」が始まるにあたり，地域や学校によって開始学年が異なっていたり，外国人指導助手の配置に差があるなど，必ずしも全国同じような指導体制がとれるわけではない。しかし，各小学校・教育センター・教育委員会などでは，これまでの研修の積み重ねを生かし，一生懸命にできるだけの努力をしている様子がうかがえる。与えられた条件の中で，それぞれの地域の特性を生かし，様々に工夫し，その最大値を引き出そうとする様子が見られる。

② 英語活動から中学校英語科へと小中連携を考える機会

一般的には，「英語ノート」や「電子黒板」をどのように活用するか，授業をどのように組み立てるかといった明日の授業に直結した問題に向き合っている。従って，中学校英語の入門期にあたる部分にどのようにつなげるかといった観点で考えることはあまりないようだ。

③ 「コミュニケーション能力の素地を養う」のは外国語活動だけの役割か？

中学校教師の目には，週1回，2年間の外国語学習で，英語ノート2の最終項目 "I want to be a...." にまで導くことは，困難な道のりに見える。なぜなら，この表現は中学校で英語科の教師が，週3時間英語の教科書を使い，教科書準拠 CD を使った家庭学習や問題集・ワークブックなどで補い，定期テストでその定着度合いを確認しながら進んでも，1年半かかる到達地点であるからだ。

一方小学校教員からも，学習指導要項が示す「コミュニケーション能力の素地を養う」ことは，外国語の授業だけに限られた課題ではないはずだとの意見を聞くようになった。ただ楽しく学ぶ姿勢だけでなく，英語本体をどのように指導するかを指向する教員や研究会が増えてきたようだ。

④ 迷いが多く，確信が持てない

とは言え，授業の進め方や教材の扱い方がわからず不安に思っている教師は多い。多くの小学校教師は6年生での最終ゴールをイメージしづらく，確信を持って授業に臨めないという。慣れぬことなので，これは致し方ない。

また，英語を運用すること自体に自信が持てず，自分が教えて良いものか疑問に思うことも理解できる。「子どもに，英語塾の方が楽しい！と言われるのが悔しくてつらい」という教員の気持ちがわかる。

(4) 課題の背景

① トップダウンによる外国語導入と小学校教員の意識とのずれ

現職の多くの小学校教員は，英語を教えることを想定した訓練を受けていない。しかし，トップダウンで鳴り物入りで導入されてきた事柄に，面と向かって反対できるものではない。また，小学校で英語を教えるとなれば，そのために何かの時間が削られる。そこまでして導入すべきことなのか，小学校の基礎基本はどこにあるのかといった素朴な疑問がくすぶっていてもおかしくはない。

小学校の担任がALTとTTで教え，担任ができないながら頑張るところを示すことに教育的価値があるとも言われている。しかし，任されて指導案を立てるにせよ，この指導案で授業を行うようにと指示されるにせよ，日常の忙しさに加えて外国語の準備と心理的負担が加わることに同情を禁じ得ない。

② 教員養成：中英免許を持った小学校教員の登場

中学校英語の免許を持ち，同時に小学校の免許を取得した若い先生たちが，現場に登場しつつある。今後このような先生方が現場に力を与えてくれることを期待する。教員養成に対する現場の期待は大きい。

しかし，英語の免許を持った教員は状況を解決する切り札となり得るのだろうか。残念ながら新任教諭としてまず学ばねばならないことが山ほどある。また，指導要領の内容からしても発達段階的に見ても，中学英語と小学校英語は，考え方や方法論に差があるようだ。従って，現時点では小学校外国語学習に関する切り札とはなりがたいだろう。教員経験を積み，一日も早く外国語学習の中核として活躍してくれることを期待している。

③ 中学教員の意識改革

一般的に多くの中学校教員は，従来と同じ対応をしているようだ。従って小学校で貴重な時間を使って経験したことを生かした入門期の指導が行われていない。特に，特区で教科として学んだ生徒の経験を生かし切れないといった事例に顕著に表れている。

「小学校のおかげで，中学入門期のキラキラ感がなくなった」と嘆く声が中学教員から聞こえてくる。確かにバラバラな経験を持った生徒を扱うのは大変なことではあるが，それは英語科が今まで中学校から始まっていたという特殊事情によるもので，他教科では学力差や教科への興味を失った生徒に対する対応を当たり前のようにしてきたことに気づくべきである。中学英語科の奮起が期待される。

(5) 小中連携実施の留意点

① 中学校からの働きかけと対等な関係

受け取る側が先に働きかけるべきだと考える。新入生として生徒を受け取る中学校が，生徒がよりよい3年間を過ごせるようにお膳立てすると良いだろう。すでに行われている，児童・生徒に関する情報連絡会と同じ手順で進めればよいだろう。

確かに中学校英語教師は英語を上手に操ることができ，英語を教えることには長けている。しかし，小中の関係は対等でなければならない。大切なのは児童・生徒の健全なる成長だ。そのためには，まず対等な関係を築き，互いの立場を理解することが肝要だ。従来の中学校英語科の枠組みに組み込むために，小学校でアルファベットぐらい読めるように・書けるようにしておいて欲しいなどと，小学校教員に依頼すべきではない。小

学校は中学校の下請けではない。

それぞれの発達段階に応じて，すべきことがある。具体的に何ができるようになってほしいか，中学校側が知恵を出して小学校の目標設定を手助けしたいものだ。

② 中学校区での授業参観と問題点の共有

本校および附属小学校の教員が気づかなかった児童・生徒の可能性を知ったのは，互いの授業を通して生徒の生の姿を見たことに始まった。これが可能になったのも，年3回は四校研で小学校・中学校・高等学校・大学の教員が集まり，その年の課題を設定し，実践を報告し合い，その結果をまとめてきたからだと言えよう。

日常の業務をこなすだけでも大変に忙しい日々を送っている教員だが，生徒がまっすぐに歩めるようにその道を整えるために，中学校区での授業参観とそこから見えてくる問題点を共有したい。

③ コミュニケーションとしての英語学習が成立する学校作り

授業は単位時間の授業時間だけで成り立ってはいない。朝の会や昼の放送，終礼などで級友の話に耳を貸せない・発言を無視する学級や学年では，真の英語使いは育成できない。母語で挨拶・説明・謝罪などが円滑にできる環境作りを優先したい。なぜならば英語も日本語と同じコミュニケーションの手段だからだ。けんかや行き違いがあっても，一時的なものと考え，自分のことだけでなく，級友のことも大切にできる学級・学年・学校作りを目指したい。

(6) 中学校としてすべきこと

① 変化への対応

冒頭に述べたように生徒は変わってきている。「週1時間で何ができる」と高を括ってはいけない。中学校においても，週1時間で勝負している教科があるのだ。

一生懸命に取り組んでいる小学校教員や児童の頑張りを生かすために，何をどこまで取り組んだかを把握し，どれくらい身についているか新入生に問いかけてみる。たとえば，勝手知ったるアルファベットや数字に関して，英語らしいリズムやイントネーションで発音できるか試させる。「習ったこと」と「実際にできること」に差があることに気づかせ，新たな動機付けにつなげることができれば，新鮮なワクワク感の創造につなげることができよう。

今まで通りに繰り返すことが，必ずしも正しい選択肢でない場合があることを肝に銘じたい。

② 復習しながら学ぶ自立した学習者育成

小学校での学びと中学校での学びとの大きな違いを明示的に示す必要がある。具体的には，英語という技能を身に付けるためには，授業時間はもとより，家庭学習で復習しながら，自分の必要を満たしていく課題を与えたい。

これからの自分の人生に英語という武器が道を拓いてくれることを，教員や先輩たちの体験を通して実感させたい。教員が百教えるより，生徒自身が十学ぶ方が結果的に英語は身に付く。生徒の達成度は様々だが，教員は生徒の違いに応じて適切なコーチングができるようでありたい。

③ 入門期指導内容の見直し

以上の流れを踏まえ，中学校では毎年入門期の指導内容を見直すべきである。必ずし

もその内容を毎年変更する必要はないが，少なくとも，①小学校との事前の話し合いで知り得た小学校での学びの内容を検討し，計画に生かす，②早期に小学校時代での英語学習に関する調査を行い，学習の定着度を知る，③実際に新入生と授業をはじめ，生徒の反応に応じて指導内容を再検討する，といったことは行うべきだろう。

4．本校における小・中連携と入門期指導

(1) 附属小→中の連携

本校は今まで，小・中の連携には心を配らなければいけないとしながらも，具体的には，今までの入門期の指導計画を大幅に変えてはこなかった。その理由は主に，各小学校で英語活動が徐々に始まってきたと言っても，実態は様々で「このあたりまでは習得している」という共通線が全く見えなかったこと，結局体系的に学ぶのは中学からであることには変わりがないので基礎から仕切り直す方がよいこと，さらに本校生徒の7割の出身校である附属小学校でも英語については時間数，学年，形式など様々な可能性を試行していたことなどがあげられる。

理由の最後に述べた附属小では，平成20年度までは，総合的な学習の時間の中で，国際理解教育の一環としての英語活動を，2～4年生を対象に年間8時間程度，学級担任とALTのTTで行っていた。英語活動部が作成したカリキュラムを基に，各担任が教科の学習内容を英語に置き換えるなど様々な試みが行われていた。

小中連携の取り組みとしては，まず「2.」に述べた四校研が挙げられる。小中だけでなく高校とも各校の指導実践を共有したことで，音声を重視した指導を行っているなど，指導のねらいに多くの共通点があり，生徒の発表活動への意欲や発表能力を高めていることを確認できた。また，附属小での学習公開・研究発表会における英語活動の発表の助言を附属中教員が行ったり，教員・実習生がお互いの学校での授業を参観したりした。

こういった小・中連携の試みを通して見えてきた事柄の一つに，中学校での指導の成果はいかに多くを小学校での指導に負っているかということがある。本校での，クイズWhat am I？やスピーチ，チャットなどの発表活動に関して，かつては「我々が一から指導して，ここまでの成果を上げている」と自負していた。ところが，附属小の英語や他教科の授業を参観するにつれ，これらの発表活動のもとになる基本的訓練は，実は小学校で徹底的になされ，我々中学校の英語科教師はそれを引き継がせてもらい，言語形式を日本語から英語に変える部分を担っているにすぎないことを自覚した。

また，「授業参観」という一見単純な試みが多くのことを気づかせてくれることも実感した。上述の小学校での徹底的な基礎訓練に気付いたのは附属小で国語の授業を参観してからのことだった。それまでの英語の授業参観でも多くの発見があったが，国語の暗唱発表の授業では，本校生徒の豊かな表現力の源を発見することができた。また，附属小の教員に中学校の授業を参観してもらった際も，「生き生きと目を輝かせて英語の授業に取り組む生徒の姿に感銘を受けた」，「小学校での取り組みが中学校の授業にどのようにつながってゆくのか実感することができた」などのコメントをもらった。参観から得たことは日々の授業に，年間指導に活かすことができる。お互いの学校に足を運ぶというちょっとした行動から，全てが動き始めたように思う。

附属小での英語教育は，昨年度（平成21年度）に大きな変化があり，英語専科の専任

教員が着任した。現在は3～6年生に週1時間の授業を行っている。研究協議会や授業参観を通じての交流は変わらず続けているが，今年度は附属小での継続的な指導を活かすべく，中1生徒の入学前に，小・中の担当者同士が引き継ぎを行い，情報交換をした。

その引き継ぎを受け，また他小学校での実践の様子も参考にしながら，今年度の入門期指導ではいくつか修正を試みた部分があった。次頁に平成19年度（表1）と今年度（表2）の指導実施概要を示す。修正した主な点を（2）に，実践した感触は（3）に記す。

(2) 入門期カリキュラム－本年度の修正点

従来本校では，単語や文を文字で示すことなしに，多くの文を状況や絵と共に音で聞かせて理解させる活動を，1年生の4月～6月におこなっている。

このことは，言語をまず音声で理解させる，という考えによるものである。この方向性は，中学3年生になるまで貫かれている。教科書を使うようになっても音声で理解させることが先行し，その後にその内容を目で読むことになる。

しかし1年生の場合は，this も is も he, his も文字では全く示されずに状況だけで理解させなくてはならない。

表でわかるように，文字の表す音（フォニックス）の基礎を導入後，「既習表現を読む」という活動を設けて文字を見せているが，今まではそれは，教科書に入る直前であった。

これを平成22年度には，次のように修正した。

① 「既習表現を読む」の時期を早めた。

② ①以降は，口頭で導入した内容は絵でハンドアウトにするだけでなく，裏面にその文を示した。

③ 教科書に入り，文を読み書きし始める時期を早めたため，夏休み前に，各人がノートに書く活動を時間をかけて指導した。

(3) 実際の指導を経て

実際に平成22年度の1年生に指導してみた感触を4技能に分けて記す。

① リスニング

音声によるインプットに慣れている。なので，中学で英語による授業が展開されても抵抗感はない。

しかしながら，慣れているインプットは，挨拶や決まり文句，食べ物，動物の名前など，限られたものである。当然ながら，体系への意識は全くないので，なんとなく言っていることはわかる，という方向である。

② リーディング

読むことは小学校では基本的におこなってきていない。しかし，1年生で出てくる程度の単語を音声化することは，あまり難しくないようである。ただ，英語に触れているわりには機能語への慣れがない。なので，it や is などに関する理解がない。

③ スピーキング

今年は元気のよい生徒が多いために，助けられている。このことは，小学校で英語に悪いイメージを持たずに来たことを示している。

正確さに関しては，中学では，単語でなく文で言わせる場面が多くあり，ここでは当然，エラーが多く出る。このことは，本校の入門期で文を綴って見せていないことと関係すると思われ，そこを本年度は今までよりも早い時期に，習ったことを文字で見せた

表1　平成19年度入門期指導内容

	日付	口頭練習（聞くこと・話すこと）		読むこと・書くこと			
		文型・文法	語彙（含：発音指導）	文字（一単語・一文））		教科書	
				読む	書く	読む	書く
1	4/13	オリエンテーション1（約束事、持ち物、なぜ英語？、母語のペアワーク、コミュニケーションの成立条件） How many? ..., please. Thank you. Your're welcome.					
2	4/16	オリエンテーション2（自立した学習者、4技能の学習順序、授業で力をつけるコツ、家庭学習の方法）					
3	4/17	オリエンテーション3（挨拶、先生の呼び方、テープレコーダーの使い方、家庭学習記録の書き方）					
4	4/19		出席の返事 Here. 数字 0-20「私の部屋」				
5	4/20	My/Your ～　Your/My ～? Yes/No, your/my ～.	数字 21-100、～ 999 電話番号 古典 ABC の歌	大文字の名前			
6	4/23	復習 Aural Perception Test	watch, bag, umbrella, pencil case	大文字の名前			
7	4/24	ー's ～? Yes, his/her ～. No, ー's ～.	新 ABC の歌	小文字の名前			
8	4/26	My name is ～. Nice to meet you. 聞き取れない時の聞き返し方	足し算・引き算	小文字の名前			
9	4/27	This is my/your ～. That is my/your ～.	歌（7 steps）				
10	5/1	Is this/that your ～? Yes, it is./No, it is not.	「台所・ダイニング・洗面所」	文字の音①：破裂音			
11	5/7	Is this/that your ～? Yes, it is. It is my ～. No, it is not. It is not my ～.	「野菜とくだもの」	文字の音②：摩擦音			
12	5/8	Is this/that your ～? No, it is not. It is not my ～. It is ー's ～.	「動物と乗り物」	文字の音③：その他の子音	大文字を書く（ﾌﾟﾘﾝﾄ）		
13	5/10	復習	アブク（abc）song	文字の音④：母音	大文字を書く（ﾍﾟﾝﾏﾝ）		
14	5/14	This/That is a/an ～.	「音楽室と理科室」		大文字を書く（ノート）		
15	5/15	Is this/that a/an ～? Yes, it is./No, it is not.			小文字を書く（ﾍﾟﾝﾏﾝ）		
16	5/17	What is this/that? It is a/an ～.	「よく知っている動物」		小文字を書く（ノート）		
17	5/18	復習			文字を書く（ﾍﾟﾝﾏﾝ）		
18	5/21	Is this A or B? It is B.	ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄﾁｬﾝﾂ① 「スポーツ」		文字を書く（ノート）		
19	5/22	This is ー. He/She is ～.	「家族や親類」 「顔と骨格の部位」	ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄﾁｬﾝﾂ② 綴りを読んでみる			
20	5/24			ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄﾁｬﾝﾂ③ 綴りの読み方を学ぶ	文字を速く丁寧に書く		
21	5/28			ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄﾁｬﾝﾂ④ 綴りを読む	プリントに単語を写す		
22	5/29	Who is this/that? It is ー. He/She is ～.	「学校でレッツスタディー」		ノートに単語を写す		
23	5/31	I am ～. We/You/They are ～ s.	「名詞の複数形」				
24	6/1	his/her ～.			ペンマンの単語を書く		
25	6/4	I like ～.	「色」	既習表現を読む①			
26	6/5	去年のテストを解く					
27	6/8	復習		既習表現を読む②			
	6/13	前期中間考査					

表2　平成22年度入門期指導内容

	日付	口頭練習（聞くこと・話すこと）		読むこと・書くこと			
		文型・文法	語彙（含：発音指導）	文字（一単語・一文））		教科書	
				読む	書く	読む	書く
1	4/14	オリエンテーション１（挨拶、先生の呼び方、授業で力をつけるコツ、約束事、持ち物、出席の返事）How many? ..., please. Thank you. Your're welcome.					
2	4/16	オリエンテーション２（テープレコーダーの使い方、家庭学習の方法、家庭学習記録の書き方）					
3	4/19		古典ABCの歌 数字0-20「私の部屋」	大文字の名前			
4	4/20	My/Your ～　Your/My ～? Yes/No, your/my ～.		小文字の名前			
5	4/23	復習	数字21-100、～999 電話番号		大文字を書く(ﾌﾟﾘﾝﾄ) 姿勢・ペンの持ち方		
6	4/26	足し算・引き算	歌（7 steps）	文字の音①：破裂音	大文字を書く(ﾍﾟﾝﾏﾝ)		
7	4/27	―'s ～? Yes, his/her ～. No, ―'s ～.	文房具　「ﾘﾋﾞﾝｸﾞ・台所・ﾀﾞｲﾆﾝｸﾞ」		大文字を書く(ノート)		
8	4/28	My name is ～. Nice to meet you.		文字の音②：摩擦音	小文字を書く(ﾍﾟﾝﾏﾝ)		
9	4/30	This is my/your ～. That is my/your ～.	「顔と骨格の部位」	文字の音③：その他の子音	ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄ小テスト		
10	5/7	Is this/that your ～? Yes, it is./No, it is not.					
11	5/10	Is this/that your ～? No, it is not. It is not my ～. It is ―'s ～.		文字の音④：母音			
12	5/11	This/That is a/an ～.	曜日	単語を読む① (綴り通りの発音)			
13	5/12	Is this/that a/an ～? Yes, it is./No, it is not.		単語を読む② (綴り通りの発音)	プリントに単語を写す		
14	5/17	What is this/that? It is a/an ～.	「よく知っている動物」　ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄﾁｬﾝｽﾞ		既習語を書く		
15	5/18	復習		綴りの読み方を学ぶ ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄﾁｬﾝｽﾞ	単語の書き取り		
16	5/19	Whose ～?		既習表現を読む① 今日の基本文			
17	5/21		名詞の複数形	今日の語彙	既習表現を書く		
18	5/24	This is ―. He/She is ～.	月の名前 「家族や親類」	今日の基本文 今日の語彙			
19	5/25	Is ― your ～ teacher? Yes, he/she is. No, he/she isn't.	教室関係・教科名 Let's sing ABC	今日の基本文・語彙 Let's sing ABC			
20	5/26	Who is this/that? It is ―. He/She is ～.	月日、序数	今日の基本文 今日の語彙	ノートの作り方		
21	5/31	I am ～.　You are ～.	「いろいろなスポーツ」	今日の基本文・語彙			
22	6/1	We/You/They are ～ s.		今日の基本文			
23	6/2	I like ～.	色	既習表現を読む② 今日の基本文・語彙			
24	6/4		クラブ	今日の語彙		L1	
25	6/8					L2	L1
26	6/9					L2	L1
27	6/11	去年のテストを解く					
28	6/14	復習					
29	6/15	復習					
	6/16	前期中間考査					

のである。

文字で見せることを最後まで残しておくと，最後に非常に多くの様々な文を一気に読まなくてはならないという負担が生徒にある。実際には，授業でもあつかっているNHKラジオ講座「基礎英語」のテキストにも綴りがたくさん出ているので，今までも多大な負担ではなかったかもしれないが，学校では綴りを見せていないこととの矛盾はあった。時期を早めたことでその矛盾も軽減させた。

④ ライティング

文字については，鉛筆の持ち方にも言及し，ていねいなブロック体を指導したが，6月のテスト後には，ペンマンシップ通りでなく，やや細い書体，やや右に傾いた書体も紹介した。いつまでもまん丸の書体では書き続けることはできないと思うので，このこと自体は良い。しかし，重要なのはその後これらを使ってどのように書いていっているかの定着である。今年は夏休みまで日数があったので，ノートを机間巡視で見ることができた。文字が乱雑な生徒もおり，多少の指導をすることはできた。

文を小テストの場で書かせる活動も，例年のように秋からではなく，7月のうちに行った。小テストは，教師が個々の生徒がどれだけ書けるかをつかむには非常に有効であった。

夏休み前に終了するLesson 3は一般動詞の課である。ここが終了するということは，be動詞，一般動詞が理解できているということになるが，実際には例年，本文を扱っただけでは，応用できる理解に至らない生徒も多い。そこで今年は，be動詞の文なのか一般動詞の文なのかを見分けるようなハンドアウトも作って，夏休み前に扱った。

平成22年度に1年生を担当して全体的に感じることは，小学校で英語に触れてきている今年の生徒は，決して英語をあきらめていたり，嫌いになっていたりはしていないということがある。これは素晴らしいことである。それと同時に，教科ではない形で英語を習ってきたために，「地道な勉強」と結びつかずに中学に入学しているように思われる。

具体的には，以前の中学1年生は，はりきるあまり，つづりを必要以上に覚えようとする生徒がいた。ここのページは覚えてこよう，と言えば必死で取り組む生徒が少なくとも中学1年生ではほとんどだった。それが，比較的まじめな生徒でも，そのような課題への取り組みが何か甘いように感じられる。

中学での「英語学習への取り組み（授業を受けるだけでは不十分。家庭学習で定着を図る)」を4月にしっかり指導することが，小学校で楽しく触れた経験を，マイナスの効果でなく，プラスの方向に生かすことになると感じる。

5．まとめ

「4.」では全国の小・中学校が小学校の外国語活動と中学校の英語教育の連携に関して抱える問題点を明らかにし，「5.」では本校におけるここ数年間の小中連携と入門期指導の実績を概観してきた。そして，そこで取り上げられた諸々の具体的な問題点について，今後どのように取り組んで行くべきかということも述べてきたつもりである。それを改めて読み直していただければわかることであるが，目の前にある取り組むべき問題点はあまりにも多い。しかし，こうした問題点は，私たち中学校の英語教師及び小学校の外国語活動担当教師

が個々の問題点に右往左往するのではなく，より大きな視点に立って指導に臨むことから解決への道筋が見えてくるのではないかとも思われる。そこで，それを以下の２点に整理して，私たちが取り組むべき今後の課題としたい。

(1) 小学校と中学校が互いに学び合うこと

同じ英語という言語を扱っているとはいえ，小学校の外国語活動と中学校の英語教育では指導目標が大きく異なっている。両者の新学習指導要領の「目標」の記述を比較すると，語尾が異なるくらいにしか感じられないが，実際の指導では「どこまで指導するのか」ということがまったくちがうと言っていい。一方，小学校と中学校は互いに「文化がちがう」と言えるほど教科指導や児童・生徒指導に対する考え方が異なっている。ところが，これらのちがいを考慮せずに，「小中一貫カリキュラムを作る」という名の下に，言語指導の連続性のみを考えた指導計画を作成している自治体や学校区があると聞く。もちろん，小中連携を意識したカリキュラムをすでに作成していたり作成途中である自治体や学校区を一律に批判しているわけではない。「餅は餅屋に任せる」ということばがあるとおり，そもそも小学校には小学校の指導観と指導法があり，中学校には中学校の指導観と指導法がある。しかも，外国語活動と英語教育では達成目標が異なっているわけである。したがって，それを無理につなげる必要はないということを強調したいのである。これは互いに何もしないで静観するだけでいいと言っているわけではない。むしろ，これまで以上に小学校と中学校が互いを知ることが重要になってくる。そうすれば，中学校は小学生が外国語活動で何を学び，中学校で英語を教科として学ぶにあたってどのような知的・精神的レディネスを持ってきているのかがわかり，小学校は中学校が生徒に３年間でどのような力をつけさせようとしているのかを知ることで，小学校の間に何を指導しておいたらいいのかということを理解できるのである。すなわち，これから私たちがなすべきことは，一貫カリキュラムという形を整えることよりも，小中間でより実際的・実践的な交流を深めることではないであろうか。

一方で大塚地区にある筑波大学の附属３校（附属小学校，附属中学校，附属高等学校）と筑波大学は，それぞれの教科で12年間一貫カリキュラムやアーティキュレーションに関する研究を行ってきた。さらに，附属小学校では，平成21年度より外国語活動を専科とする教師が中心となり，新たな歩みをはじめた。様々な課題を抱えつつも，より豊かな実際的・実践的交流を通し，よりよい小中連携を目指した実践を行っている。

(2) 中学校入門期指導の落とし穴への対応

本校の生徒を見ても，他校の多くの先生方の印象を聞いても，小学校外国語活動または総合的な学習の時間の１つとして行われた英会話を経験してきた１年生が入門期の授業において以前より意欲が落ちているということはないようである。むしろ，英語の授業は積極的に活動し，楽しんで受けるものであると全体としては思っているようである。この点は小学校の先生方が外国語活動の目標を十分に理解し，しっかりと指導してくださっているおかげであると言える。しかし，「３．(6)」でも触れられていることであるが，教科として学ぶ中学校の英語を指導する立場からは，中学校１年生の新鮮な目の輝きがなくなったということよりも，生徒が教科の１つとして学ぶ英語の学習に対する意識が下がっているということの方が大きな問題である。これは，外国語活動の授業では児童は新しい表現を覚えるまで練習することや，力がついているかを評価されるということまでは求め

られない，つまり，極端に言えば家庭学習は一切必要ないという経験からきているものと思われる。その小学生たちが中学校に入って，教科として学ぶ英語を外国語活動と同じものであると考えているとしたら，その部分の意識改革をきちんとしないかぎり，以前よりも英語を勉強しない生徒が多くなるのは当然だと言える。特に，「聞くこと」「話すこと」を中心とした入門期指導は外国語活動とそう変わらないような印象を生徒に与える可能性が大きいので，中学校教師はこれまで以上に慎重に家庭学習をきちんと行わせる指導をこの時期にしっかりと行わなければならない。それを怠ると，すぐに「英語がわからない」→「英語がきらいだ」という生徒を増産することになる。なお，誤解を防ぐために断っておくが，だからと言ってこの現象が小学校の指導のせいであるということではない。小学校の先生方が中学校の英語学習のことまでを考えて家庭学習を小学校でさせるようなことは必要はないし，むしろそれをさせてしまったら小学校の外国語活動は崩壊してしまうだろう。この点については，あくまでも中学校教師が以前よりも特に注意して指導にあたらなければならないことである。

＜参考文献＞

文部科学省.(2008).『学習指導要領』
文部科学省.(2009).「平成21年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査」